

「学校評価報告書」

1 令和6年度 学校教育目標および重点目標・教育課題

【学校教育目標】 ・自ら学ぶ ・友と学ぶ ・仁科の里に学ぶ	教育課題	
	○経営理念： 一人ひとりの輝きを認め合う学校	
	○教育課題： 自己調整学習力・自己有用感の育成	
	重点目標 1 学びづくり	○主体的・対話的で深い学びを
	重点目標 2 なかまづくり	○子ども一人一人が主役となる学びの場を

2 本年度の「成果と課題」および令7度に向けての「向上策・改善策」

重点	成果と課題	向上策・改善策
学びづくり	対話を基盤とした協働の学びに向けて、子どもが思わず考えたくなる「問い」の精選、「単元の核心」を明確にした単元構成、思考の流れを外化するマインドマップの活用を切り口に、LCで検討し一人一公開授業を通して授業改善に取り組んできた。特に「問い」の精選については、「単元の核心」に迫るために、授業の終末の子どもの学びの姿の具体的な姿をもとに、その単元でつきたい見方・考え方を明らかにすることが大切であることに改めて気づき、教材研究を丁寧に行おうとする先生方の意識が高まった。また、1学期の教職員のアンケートでは、子どもの対話の時間が短かったことや、マインドマップの作成がうまくできなかったという反省から、2学期は、対話の時間を十分とすることと、授業の終末にマインドマップを作成する時間を必ず設けることを意識して取り組んできたことで、子ども自身が本時で学んだことは何かを明らかにするとともに、次時に向けた学びの見通しをもととする姿に出会うことができた。今後は協働の学びが子ども主体の学びになるよう、問いや3つの思考（比較、関連、分類）を踏まえた教師の支援の質の向上、教師の必要な支援のあり方をさらに追究していきたい。	授業者全員に指導者がつく公開授業等、今年度の取り組みを引き続き継続すると共に、授業の質的向上に向けて、普段から教職員同士が互いに参観したり、放課後に授業改善に向けた語り合う場を設定したりするなど、日常的に授業改善に向けた取組を行っていききたい。また、協働の学びでキーワードとなる「単元の核心」「問い」「今日の結び目」「マインドマップの作成」等について、授業参観等で話題にしていく。また、協働の学びの更なる充実に向けて、子どもたちが思わず考えたくなる「問い」のあり方について、単元の核心に迫るための教材研究や子どもの実態を捉えた上で、子ども同士の対話をどう設定すると有効なのか、3つの思考（比較、関連、分類）を促す教師の出のあり方はどうあるべきかなど、学習の主体である子どもを真ん中にした協働の学びのあり方をさらに研究していく。さらに、教育課題を基盤とし「見方・考え方」で繋ぐ教科横断的なカリキュラムマネジメントについて、LCで話題にしていききたい。今後、子どもの学びの姿について、保護者への理解をさらに深めていくために、学級懇談会や個別懇談会等で、「マインドマップ」等を提示し、子どもの学びの具体的な姿を伝えていくようにしていきたい。
なかまづくり	「協働の学び」を中心としながら、成功体験や分かる・できる喜び、友との学びを積み重ね、また、自己有用感の育成に取り組んできた。特に、異学年交流では、縦割り班で行う交流活動や児童会での行事、運動会での縦割り班種目の実施などを運じて、子ども同士が互いに認め合い大切にしようとする姿が見られた。また、その姿を教職員が子どもへ返すことで、クラスみんなを認め合う雰囲気が増えてきている。一方で、友だちとのかわり方でマイナス評価の子どもも少なからずいることから、更なる方策を検討するとともに、すべての子どもが安心・安全に学ぶことができる学校づくりをこれからも行っていく必要がある。	子どもが安心・安全に学校生活を送ることができるよう、すべての教職員が、「心の土台」をもとに、子どもの声に耳を傾け、認め、受け止め、励しながら、子どもとの信頼関係を築くところから始めていく。その上で、個別あるいは集団に対しての支援について、子どもの様子を見ながら行っていく。特に対応が難しい場合は、学校全体で支援体制を整え、教職員が一丸となって対応にあたるようにしていく。また、学校が閉校となることから、新校への希望がもてるよう閉校記念行事等の取組を通して、子どもの活動の取組を互いに認め合いながら自己有用感を育んだり、不安の解消に向けた個別の相談等を丁寧に行ったりしていきたい。

3 学校長による「経営ビジョン」に対する振り返り（自己評価・総合評価：**別紙参照**）

4 学校運営協議会長による学校の「重点目標」への取り組みに対する評価（学校関係者評価：**別紙参照**）